

# 白藍塾オリジナル

## 2022入試小論文分析&解答のヒント

2022年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

### ● 慶応・経済学部

今年度も、例年通り、説明問題（200字）＋小論文問題（400字）の2本立て。ただし、課題文は1昨年同様、また2つになった。とはいえ、文章自体はどちらも難しいものではない。

設問Aでは、課題文Iに基づき、個人の多様な意見を反映する集団的意思決定ルールとして、多数決の問題点を説明することが求められている。これはほぼ課題文Iの内容をまとめる問題と言っていいだろう。

簡単に言うと、人々が互いに意見を交わすうちに、自分の意見を譲らない一部の人の意見がそれ以外の人の意見に影響を与えて、全体の世論を左右してしまう、ということだ。つまり、多数決の仕組みによって、かえって集団的意思決定が少数の意見に支配され、個人の多様な意見が反映されにくくなっているわけだ。SNSの普及によって、多くの人が地域や生活様式を超えてつながりやすくなったために、かえってそうした傾向が強まっている。そうしたことを、字数に合わせて説明するとよいだろう。

設問Bは小論文問題だが、いくつか条件があってかなりややこしい。設問では、課題文Iを踏まえた上で、課題文IIにおける「学問への参入者の増大」により生じうる問題と、それに対して「一人の人間が持つ知性が一体どんな意味を持ちうるのか」について論じることが求められている。

「学問への参入者の増大」により生じうる問題として課題文IIが指摘しているのは、最後から2番目の段落にあるように、「徹底した分業と、階層化の進展」ということだ。つまり、楽観的な予想のように科学の普及と民主化が進むのではなく、地道なデータ収集に関わる一般の市民と、それを主導する少数の科学者集団とに階層が分かれてしまう、というわけだ。

第1部でそうしたことを簡単にまとめた上で、そうした学問のあり方に対して、「一人の人間が持つ知性」の持ちうる意味について、問題提起の代わりに自分の考えを示すとよいはずだ。

「課題文Iを踏まえた上で」とあるが、先ほど説明した「学問への参入者の増大」によって生じる問題というのは、まさに設問Aで答えたような、「集団的意思決定ルール」としての多数決の抱える問題と同じようなものと言えるだろう。

したがって、第2部で「学問への参入者の増大」が科学者集団による学問の支配につながる危険性を指摘しつつ、一般の市民が科学者と対等に話し合ったり交流をしたりする場やルールを設けることで、

「集合知」をもたらす可能性があることなどを論じるとよいだろう。

字数が少ないので、掘り下げる必要はない。慶応・経済学部でときどき出題される、知や学問のあり方をテーマとする問題なので、過去問をしっかりとやってきた受験生にとっては、そこまで難しくはないはずだ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>